http://www.city.chiba.jp/kyoiku/shogaigakushu/shogaigakushu/kyodo/kyodo_top.html

ちば市史編さん便り

Chiba-shishi News Letter NO.5 2010.9

千葉市史編さん担当
〒 260-0856
千葉市中央区亥鼻 1-6-1
千葉市立郷土博物館
℡ 043-222-8231

ちば歴史散策 こぼれ話 第３回　幕末の旗本家族と知行所村々

幕府は江戸が戦場になることを予想して、文久２年（1862）以降何度か、大名・旗本諸家に対し嫡子や家族を国元へ帰してよいという触を出しています。市内に知行所（領地）を持っていた旗本建部氏もこれを受け、同３年に知行所の一つである丹尾村（現東金市）へ「立退所」を設置しました。先日郷土館へ寄贈された「非常并御立退ニ付出人足調帳」という史料は、立退所への移動に伴う領内各村の人足数や名前･賃金などを期間別で書き上げたもので、５～７月の３ヶ月間で惣人高は 274 人に及んでいます。これに先行し３月には長持等が下谷の屋敷から丹尾へ運ばれたことが先触などの史料からわかり、４月には、いよいよ奥方たちの丹尾行き道中の賄のため先納金が課せられています。その請書の宛先は「御立退所御役人中」となっており、役所内でも急な事態に対処するため、ほぼつきっきりとなった役人がいたのかもしれません。また、４月から５月にかけては、知行所村々の役人は、各村およそ十日ずつ交代で丹尾に詰めていたようです。

明治元年（1868）12 月には建部氏が９月に丹尾村へ帰農したことが小山村の村役人中から「地方役所」（当時小山村を支配していた鶴舞藩の役所か）へ届け出られました。

市内を支配していた旗本のうち、他には鈴木氏が明治元年に旧知行地の車方村（現船橋市）へ寄留、小幡氏が明治期以降大木戸村（現千葉市）へ居住、三嶋氏が慶応３年（1867）に帰農を決意し知行所農民の承諾のもと当主らは岩田村（現群馬県板倉町）、先代･室･娘は越智村（現千葉市）、他の家族は相川村（現市原市）へ分散、林氏が平川村（現千葉市）に維新後寄留したことなどが確認できます。幕末から明治にかけての激動の時代、それまでの支配層である旗本の家族や領地の人々も否応なしに変化に巻き込まれていたことがわかります。

平成22年度（後期）千葉市史主催イベントのご案内

１　市史研究講座（第２回）

定員 200 名、各講座 90 分。於千葉市民会館小ホール。
日程：10 月 30 日（土）時間：10 時 20 分～ 16 時 20 分。
※ 9 /15 号の市政だよりで募集。10/13 必着。講演内容については先頭ページをご参照ください。

２　古文書講座

初級古文書講座

古文書読解初心者対象。テキストは江戸時代に書かれた古文書の複写。くずし字の基礎を学ぶ講義形式の講座。前期・後期の２回開催（各５回）、前期は既に終了。後期日程は 11/17･11/24･12/1･12/8･12/15（水曜午前）。講師は高見澤美紀先生（千葉市史編集委員会委員）。
11 ／ 1 号の市政だよりで募集。
※前期に受講された方は、同内容のため後期受講不可。

中級古文書講座

古文書に慣れ、ある程度読める方対象。テキストは江戸時代に書かれた古文書の複写。全５回。日程は 12/3･12/10･12/17、平成 23 年 1/14･1/21（金曜午後）。講師は後藤雅知先生（国立大学法人千葉大学教育学部准教授、千葉市史編集委員会委員）。
11 ／ 15 号市政だよりで募集。
※どちらも定員 30 名。於千葉市立郷土博物館講座室。

どの講座も往復葉書でのお申し込みです。
住所・氏名 (ふりがな)・年齢・性別・電話番号を明記のうえお申し込みください。
詳細は市政だより・郷土博物館 HP でご確認ください。
http://www.city.chiba.jp/kyoiku/shogaigakushu/shogaigakushu/kyodo/kyodo_top.html
※申込み多数の場合、抽選となります

３　市史ミニ企画展

「検見川の海と人と」－新井英夫氏所蔵写真展－
※会期など詳細は見開きページをご参照ください。

あとがき

ちば市史編さん便り５号をお届けします。
第１回研究講座は大盛況でした。いろいろ不備がありご迷惑をかけましたが、講師の先生方、参加者の皆さま、ありがとうございました。
本号では試みとして『千葉いまむかし』連載の「紙上古文書講座」を出張させてみました。『千葉いまむかし』は内容の解説が主ですが、「編さん便り」では初級古文書講座の最初に行うような基本の「き」を載せてみました。これから古文書を勉強し始めようという方にとって参考になれば幸いです。

千葉市史の事業にご協力お願いいたします！

市史編さん担当では、千葉市の歴史に関わる資料を探しています。お宅に古い文書や写真などがございましたら、ぜひ市史編さん担当（℡ 043-222-8231）までお知らせください。同時に、近現代編の刊行に向け聞き取り調査も行っています。戦時中や戦後の体験など貴重なお話をぜひお聞かせ下さい。
また、明治や大正期の古い新聞の千葉市関連記事のチェックおよび記事データのパソコン入力をボランティアでお手伝いいただける方を募集しています。関心のある方は担当までご連絡ください。

平成 22 年度第１回千葉市史研究講座のご報告

去る６月 26 日（土）、千葉市民会館において平成 22 年度千葉市史研究講座（第１回）を開催しました。例年応募者が多い人気講座です。本年度は２回開催ですが、第１回はテーマを「千葉市の戦国時代」とし、三人の先生方に講演をお願いしました（先生のお名前と講演内容は下記）。

講演１	房総酒井氏について 滝川恒昭先生（千葉県立船橋二和高等学校教諭）
講演２	戦国時代の千葉氏御一家 黒田基樹先生（駿河台大学准教授）
講演３	享徳の乱と房総 峰岸純夫先生（東京都立大学名誉教授）

全ての講演終了後ディスカッションを行いました。短い時間でしたが、受講者の質問に熱心にお答え頂きました。
また、当日は暑い中、数多くの市民の方々にご参加頂きました。250 名の当選者のうち、およそ９割が参加という驚くべき出席率で、午前・午後と一日ほぼ通しでの受講にも関わらず、その熱心さに頭が下がる思いでした。
第２回は「千葉市の明治・大正・昭和」をテーマに三人の先生方にお願いしています（先生のお名前と講演内容は右記）。第１回同様多くの方のご参加をお待ちしています。

市民の声　千葉市史研究講座を受講して

六十年近く千葉市に住んでいますが、私の中の千葉氏は「伊豆で挙兵した源頼朝が石橋山の戦いに敗れた後に安房国へ逃れたとき常胤が加勢をし、頼朝の信任を得、鎌倉時代の前期に活躍をした一族」という程度の認識でした。
大河ドラマにもほとんど取り上げられることもなく、何となく歴史の表舞台から忘れ去られた感があります。
定年後の趣味にと千葉市の古文書講座に一年通い、その後先祖調査をしましたら、檀那寺の梵鐘に刻まれた寺の由緒を示す説明文から市ヶ谷月桂寺の末寺であることを確認しました。また、千葉市郷土博物館で小弓公方に係る展示があり、「島子」の文字を見つけました。武士の天下を治める秀吉や家康により、源氏の血を引く「島子」は大切にされ、扶持を与えられ喜連川氏の基となり、いまは月桂寺に眠っています。
戦時中両親が栃木県の喜連川に疎開し、私は当地の元家老のお宅で生れました。
偶然重なったこれらの「縁」を解き解し再構築したいと思っていた矢先、本講座を市政だよりで知り、申し込みました。
当日、会場は満員で男性が大多数を占め、90％ぐらいの方は 60 歳以上ではないかと推察しましたが、大変熱心な受講態度に圧倒されました。講演は、軽妙な話術を交え、プロジェクターではなく充実した配布資料に沿って行なわれ、解かり易く後日の復習にも役に立つと思います。
私にとっては、千葉氏全体を俯瞰でき、また応仁の乱に先立って、関東を舞台に権力の二重構造による戦国時代の緒ともいえる戦乱が始まっていた等、多くの新たな知見を得る機会になりました。
今後も、講座を永続いただくよう切望いたします。
（平成 22 年度千葉市史研究講座第１回受講　井田晃さん）

平成 22 年度第２回千葉市史研究講座

千葉市の明治・大正・昭和

講演１	戦後町村合併をめぐる紛争―幕張町を中心に― 中村政弘先生（八街市立八街中央中学校教諭）
講演２	千葉を愛したフランス人画家ビゴー 清水勲先生（ジョルジュ・ビゴー研究家）
講演３	県都千葉町の町村制 神山知徳先生（昭和学院中学校・高等学校教諭）

千葉市史編さん担当では、一昨年より郷土博物館の展示スペースを一部使って、「市史ミニ企画展」を開催しております。

第２回目となる今回は、検見川町にお住まいの新井英夫さんが撮影された、昭和 20 年代から 40 年代の検見川町周辺の写真を展示いたします。埋め立てが進む前、漁村としての姿を残す検見川の浜や、当時の学校生活、祭礼の様子など、「ちょっと昔」の検見川をご覧いただきたいと思います。

本号では、企画展に先立ちまして、新井さんよりお借りした写真をほんの一部ご紹介します。ご興味もたれた方は、ぜひ足をお運びになり、大きな写真で細部までじっくりご覧ください。

ご来場をお待ちしております。

産業

検見川を含む東京湾沿いの地域では、海で採れた貝殻を焼いて肥料などに使う石灰を作っていました。写真は志村貝灰工場です。

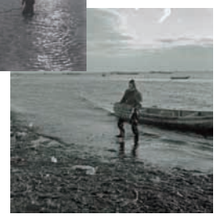
ちば市史 MINI 企画展

「検見川の海と人と」

―新井英夫氏所蔵写真展―

〔会期〕平成 22 年 10 月 14 日（木）～ 12 月 12 日（日）
〔会場〕千葉市立郷土博物館２階展示室
＊月曜日、祝日は休館（月曜が祝日の場合は翌日も休館です）
〔お問い合わせ〕郷土博物館市史編さん担当　TEL 043-222-8231

海



上の写真は、投網をしているところです。
下はあさりを採って戻ってきたところ。あさりそのものは沖で漁業組合の伝馬船に納め、陸へあがるときには殻と引換証を持って帰りました。

海苔を干しているところです。検見川では海苔は戦後になってから始めたそうです。海苔の他にも、「かわな」も採って干し、菓子やふりかけなどにいれたそうです。

海苔採り船です。埋め立てが始まった後も、まだ埋め立てられていない沖の方で変わらず海苔採りが行われていました。

祭

尾鷲神社では、船橋大神宮・幕張の昆陽神社と並び称される勧進相撲が催されていました。戦後もしばらくは素人相撲として有名だったそうです。

八坂神社（現検見川神社）の祭礼です。８月１～３日に行われ、年番の町内は揃いで浴衣を作って祭礼に臨みました。

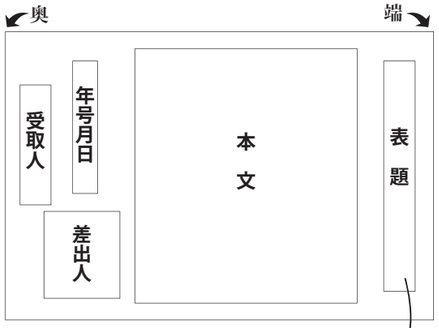
参考として…

『千葉いまむかし』№４に新井さんよりご寄稿いただいております。残念ながら在庫切れのため、販売は行っておりませんが、ご興味のある方は図書館などでご覧いただければ幸いです。

出張!!紙上☆古文書講座

～基本の「き」をおさらいしよう～

江戸時代に書かれた古文書（一紙のもの）は基本的に下の形です（書状などは除きます）。



表題はこの文書のタイトル、「覚」や「乍恐以書付奉願上候」などが書かれます。
そのあと、本文の内容があり、年号月日、文書を作成した人（差出人）、文書の宛先（受取人）が書かれるのが一般的です。
差出人と受取人の書かれる高さは、その人たちの身分の高下によって変わることもありますが、基本的には左の形です。
紙の書き始める側を「端（はし）」、書き終わりの側を「奥（おく）」と言います。

たとえばこんなものがあります

おや？　この二文字似てますね…
今回はこちらのくずしを覚えましょう！この二文字はどちらも

図式化すると

…こうなることが多いです。
もちろん頁のままも、分かり易く　といった形もあります。

頻出で、かつよく似た形になる三文字の見分け方をおさえておきましょう。

それぞれ以下の文字の偏部分です。
願　預　頼

ポイントは大きく二つ。
①縦棒が上に突き抜けるかどうか
→突き抜けるのは「頼」のみ
②縦棒の下が交差するかどうか
→「預」は交差しないことが多い

例外
「頭」のくずしは　になることがあります。他と頁の形が異なります。

＊あくまで基本です。どうしても判別のつかないこともあります。そのときは前後の内容で判断しましょう。

ぶれいく　江戸時代の文書の書体

江戸時代には公的な文書は、基本的に「御家流（おいえりゅう）」という書体で書かれました。この書体は幕府の公用書体として使われていたため、全国どこへ行っても同じように文書が読めるわけです。

御家流は、青蓮院門跡尊円入道の創始した和様書道の一流です。青蓮院流・尊円流、また青蓮院が粟田口（あわたぐち）にあることから粟田流ともいわれたそうです。御家流と一般に呼ぶのは、青蓮院門跡に対する人々の敬意の表れと考えられ、中世・近世に流布し和様書道の中心となったとされています。平明で穏温和な書体であることや幕府の右筆（ゆうひつ）の中に根強い支持層があったことから、幕府の公用書体として用いられましたが、時代が下るに従い芸術性が失われ、形骸化していきました。

ここでちょっとした知識を。いわゆる古文書が幕府の公用書体である御家流で書かれたのは勿論ですが、のみならず、千葉との間にはある関係がありました。

現在の千葉市・東金市・市原市ほかの範囲に知行地（領地）を持った旗本に建部氏があります。この家の当主の一人、賢文は若くして青蓮院尊鎮法親王の門下に入り、のちに能筆家として名をはせました。慶長元年（1596）には昌興が家康に右筆として仕え、知行地五〇〇石を賜っています。幕末の文久三年（1863）には建部氏の家族の立退所が丹尾村（現東金市）に設置され、明治元年（1868）には同村に帰農を願い出ています。

＊『日本史広辞典』（山川出版社）
『国史大事典』
『千葉いまむかし』７号より

旗本建部氏については裏側もご覧ください。